

# 無秩序から抽出される意味 — 廃墟の写真作品を中心に —

新谷 玲<sup>1</sup>・齋藤 潮<sup>2</sup>

<sup>1</sup>学生非会員 工学 東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻  
(〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1, E-mail: araya.r.aa@m.titech.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 工博 東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻 教授  
(〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1, E-mail: usaito@soc.titech.ac.jp)

現在遺されている廃墟や産業遺構は様々な理由から放置され、これらは既に積極的な機能を失っている。そこには無秩序と混沌のみが過去の残滓として存在しており、これらの景観や眺めには設計者が存在しないが、多くの好事家や写真家はその眺めの中に価値を見出し写真として切り取っている。本研究では、意味の提示されていない廃墟の無秩序のなかから意味を拾い上げる過程に着目し、撮影された写真作品の撮影位置と方向・作品のフレーム内に収められた対象と敢えて除外された対象を分析し読み解くことで、意味を抽出する過程を考察する。

キーワード: 廃墟, 産業遺構, 写真, 意味

## 1. 序章

### (1) 背景と目的

現在残されている多くの廃墟や産業遺構はその本来の機能停止後に跡地利用が難しいこと、管理を続ける事も困難であったことから建物・施設などが放置され無秩序と混沌のみが過去の残滓として存在している。

これらの無秩序と混沌は価値を見出されるべく存在してはいないが、多くの好事家や写真家はその眺めの中に価値を見出し、写真として切り取っている。従って撮影された写真を読み解くことで、意味の提示されていない廃墟の無秩序の中から意味を抽出する過程に関する知見を得ることができると考え、これを本研究の目的とする。

### (2) 既往研究と本研究の位置付け

写真の構図を扱った研究には、絵葉書やガイドブック掲載写真には「型もの」が存在するとし写真を「一般大衆からみた景観像を代弁したもの」であるとして主題要素の写され方から構図の特性解析を試みた神谷ら<sup>1)</sup>の研究がある。

写真を表象として扱った研究には、視線入射角や俯角の変化を指標化したモデルによって写真家による近代土木構造物を写した写真で強調される特徴を見出した横塚<sup>2)</sup>の研究がある。

これらは既に意味付けがなされ、共有された意味が提示されている対象、積極的な機能を有した対象を扱って

いる。これに対し、本研究は積極的な機能を既に失っている対象、意味付けが確立されていない対象を扱い、無秩序と混沌から意味が拾い上げられる過程についての一知見を得ようとするものである。

### (3) 本研究の構成

第二章にて調査の正当性を阻害する要因について考察し調査の主対象を決定したうえで、調査対象地の概要をまとめる。

第三章では写真作品の分析方法を規定し、第四章で対象地を撮影した実際の写真作品から判明する撮影地点および撮影範囲、撮影者による要素の取舍選択をまとめた上で、撮影者の対象に対する認識と対象の環境を客観的に整理する。第五章では撮影者の属性や言説との関連を踏まえ分析結果を考察し、第六章で結論とする。

## 2. 研究の対象

### (1) 対象地の選定

本研究では積極的な機能を既に失っている対象、意味付けが確立されていない対象を扱うことを目指すため、この目的と異なる価値基準が混在すると思われる以下の場所を調査対象から除外するものとする。

- ①観光地として整備されたり再利用が進んでいる場所
- ②肝試し・心霊スポットなどとして捉えられ訪問されて

いる箇所

- ③廃墟化が進んでおらず本来の姿および機能を保持して保存されているもの
- ④通常の生活空間内に存在するもの

これらを調査対象から除外するものとし、調査可能性を合わせて考慮し調査対象地としてラサ工業田老鉱山（浮遊選鉱所跡、岩手県宮古市田老）を選定する。

## (2) 対象地について

今回対象とする田老鉱山選鉱場は鉱床から得られた鉱石を破碎、浮遊選鉱を行う施設であり、田老鉱業所における主要設備であったが（図-1 ラサ工業80年史<sup>3)</sup>より創業時の選鉱場内部の様子）、現在では当時の設備はほぼ残されておらず基礎と外殻、一部の階段のみが残されている状態である（図-2 筆者撮影による2010年現在の選鉱場内部の様子）。

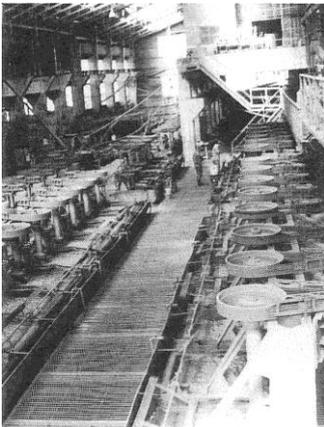


図-1 操業時の様子



図-2 2010年現在の様子

## (3) 対象地を写している作品群

廃墟を扱った作品が写真集として刊行される例は増加傾向にあるが、対象地を扱ったものに限れば作品は少ないのが現状である。従って雑誌に特集として寄稿された作品および個人出版された作品を対象作品群に加えるものとする。本研究では以下の作品群のうち対象地を写した作品を扱う。

表-1 分析対象となる作品群と付与した記号

撮影者	作品名・書籍名	出版社・発行者	出版年月	記号
小林伸一郎	廃墟漂流	マガジンハウス	2001.9	s1~s4
武部将治	ランズエンド 02	一幡公平	2007.2	t1~t8
小林哲朗	廃墟ディスカバリー	アスペクト	2008.9	k1~k3
芝公園公太郎	ワンダーJapan 10	三オブックス	2009.1	h1~h7
成宮滯	alone	成宮滯	2011.12	r1~r2

## 3. 作品の分析方法について

### (1) 写真の取り扱い

本研究では視覚論においてJ. J. Gibsonの

“すべての画像は、その創作者が注目し注目するに値するとみなしたものを保存している”<sup>4)</sup>とする立場に則る。従って作品において撮影者がフレーム内に収めたものとフレームから取外して除外したものには、撮影者の意味付けを読み取る上での大きな手掛かりがあると言える。

自身が対象地を撮影し作品を発表した経験から、これらの写真作品の細かな差異を発見し分析する事ができると考える。

### (2) 各個写真の分析方法

各個写真の分析は以下の手順で行う。

- ①現地踏査と撮影した資料写真から対象地の平面図を作成する
- ②対象地で撮影された作品について、現地踏査から得た資料と作成した平面図をもとに撮影位置と撮影方向、撮影画角を特定し、平面図上に描画する。
- ③筆者撮影による写真資料と照らし合わせ撮影範囲を詳細に特定、作品で意図的にフレームから外れている要素と、撮影対象となっている要素を特定する。
- ④全体の構図、望遠による圧縮効果、焦点位置、実際の位置関係とは異なる表現など写真撮影上の技法について意図と対象を確認する。
- ⑤以上をもとに作品の中で作家が表現しようとする事を考察する。

### (3) 画像以外の情報の扱い

作品に付与された文章と撮影者の対象地についての言説についても補助的に扱う。また本研究では写真作品の発表のみを生業としていない撮影者についても扱うため、撮影者の立場、属性についても触れる。

## 4. 各個作品の解析結果

### (1) 撮影地点および撮影範囲の特定

現地踏査および写真資料より対象地の平面図を作成した。作品に写りこんだ対象の配置と見えから各作品の撮影地点を特定、筆者撮影による写真資料および図面と照合して撮影範囲を特定した。

具体的な作業としては、まず作品内に映り込んだものの配置と、角柱や内壁の見え方から撮影地点を特定する。図-3では擬似的に壁面と床を想定し作品上にグリッドを引いている。また列柱についても3Dモデルと照合することで視線入射角を推定、撮影場所を特定できる。次に同一方向をより広範囲に写した筆者撮影資料および作成した図面と照らし合わせることで、撮影範囲を詳細に特定

し周囲の環境や作品で画面外になっている要素が判明する。(図-4)

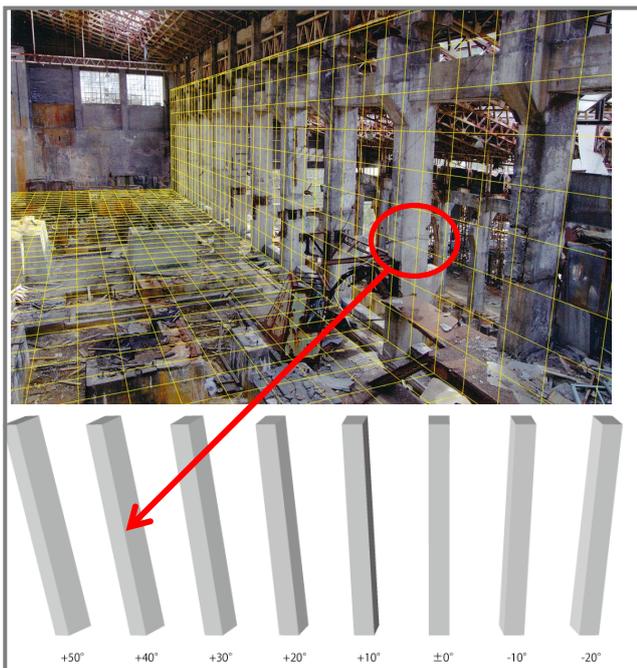


図-3 作品t-2における撮影方向の特定例

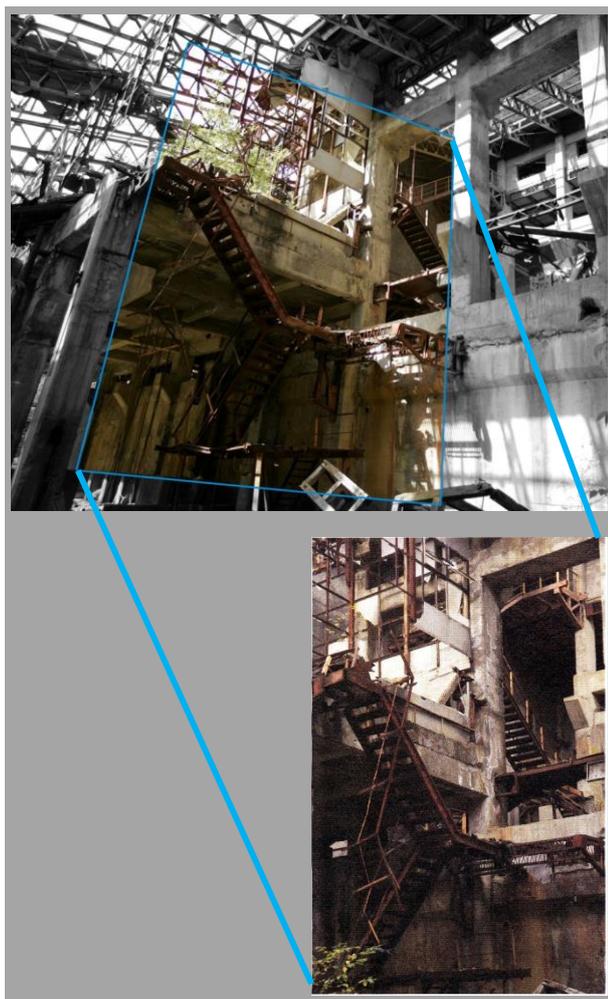


図-4 作品h6における撮影範囲と周辺環境の比較例

## (2) 撮影要素と撮影技法上の特色

選鉱場内部を写した全作品について特定を行った結果は次項の表-2および図-5の通りである。並列化して比較したことで撮影者によって撮影地点の偏りが見られ、作家性の発露あるいは表現の相違があると言える。

各個の作品には大別して以下に示す3つの特徴が見られた。

### a) 機能の把握

- ・選鉱場内部を写した5作家20作品のうち作品s2, t3, k1, k3, h1, h6, h7の4作家7作品が階段を捉えている。
- ・作品h6は2つある両階段を同時に写すことができる数少ない視点を選択している。さらに撮影範囲の両側にある柱を意図的に画面内から排除している。
- ・作品h3およびs1は撮影者、撮影位置ともに異なるがどちらも制御盤のみが捉えられている。

以上に示した作品は現在も本来の機能を発信しう対象を意図的に捉えている。対象の本来持っていた機能を手掛かりに、かつて生きられた時代の痕跡を掘り起こそうとしていると考えることができる。

### b) 幾何的規則の抽出

- ・作品集において将治は作品t1を大きく掲載した上で撮影範囲の大きく重複する作品t2を掲載しており、作品t2では均等に並んだ列柱を捉えようとした事が伺える。
- ・同様に公太郎は作品h2で1階部分に規則的に並んだ基礎と列柱を写している他、作品h7では極めて意図的に構図が左右対称になるような撮影地点を選択している。

これらの作品において将治と公太郎は、廃墟に残された数少ない秩序である幾何学的規則を抽出しているといえるが、画面に幾何的均整を持たせようとする事は対象を廃墟に限らず、作品の構成において一般的である。

### c) 喪失そのものへの言及

- ・作品k2およびt1は注視されうる個々の対象ではなく無秩序に荒廃している様を正面から捉えており、秩序の喪失そのものを抽出しようとしていると言える。
- ・作品h4で公太郎はコンテキストの存在しない、構造物の欠損部分のみを捉えることで物質的喪失そのものを抽出しようとしていると考えることができる。

以上に示した作品はいくつかの概念の、喪失そのものを抽出しようとしている。作品点数は機能の把握を扱った物に比べ少ないにも関わらず、全ての作家・作品集に喪失そのものに言及しようとする作品が見受けられた。

表-2 特定した各作品のパラメータ概略

記号	写真家	作品集	項	撮影時期	画角(±3)	撮影地点	撮影対象
s1	小林伸一郎	廃墟漂流	11	2000	55~60	3F/iC	制御盤
s2	小林伸一郎	廃墟漂流	24	1995	68.8	1F/ivC	基礎/階段
s3	小林伸一郎	廃墟漂流	50	1995	56.2	2F/iiC	構造体
s4	小林伸一郎	廃墟漂流	169	1993	88	0F/viiiE	岩壁
t1	武部将治	ランズエンド 02	11	2006.3	49.2	2F/iiiD	2階全体
t2	武部将治	ランズエンド 02	12*1	2006.3	77.8	3F/iiD階段	2階/列柱
t3	武部将治	ランズエンド 02	12*2	2006.3	64.7	2F/iiiD	階段
k1	小林哲朗	廃墟ディスカバリー	24	~2006.10	88.5	1F/ivD	階段
k2	小林哲朗	廃墟ディスカバリー	42	~2006.10	101.6	3F/iiD階段	2階全体
k3	小林哲朗	廃墟ディスカバリー	43	~2006.10	54.1	2F/ivD	階段/基礎
h1	芝公園公太郎	ワンダーJapan 10	22	~2009.1	92.1	2F/iiiJ	内壁/階段
h2	芝公園公太郎	ワンダーJapan 10	24*1	~2009.1	75.7	1F/ivE	基礎/列柱
h3	芝公園公太郎	ワンダーJapan 10	25*1	~2009.1	76	機械室/iiA	制御盤
h4	芝公園公太郎	ワンダーJapan 10	25*2	~2009.1	70~90	3F/iG	崩落部分
h6	芝公園公太郎	ワンダーJapan 10	25*4	~2009.1	38.4	1F/vE	階段
h7	芝公園公太郎	ワンダーJapan 10	26	~2009.1	60.4	1F/viiiF	列柱/基礎
r1	成宮滯	alone	60	~2011.12	70.8	1F/ivE	列柱
r2	成宮滯	alone	61	~2011.12	74.1	2F/iiiI	構造壁

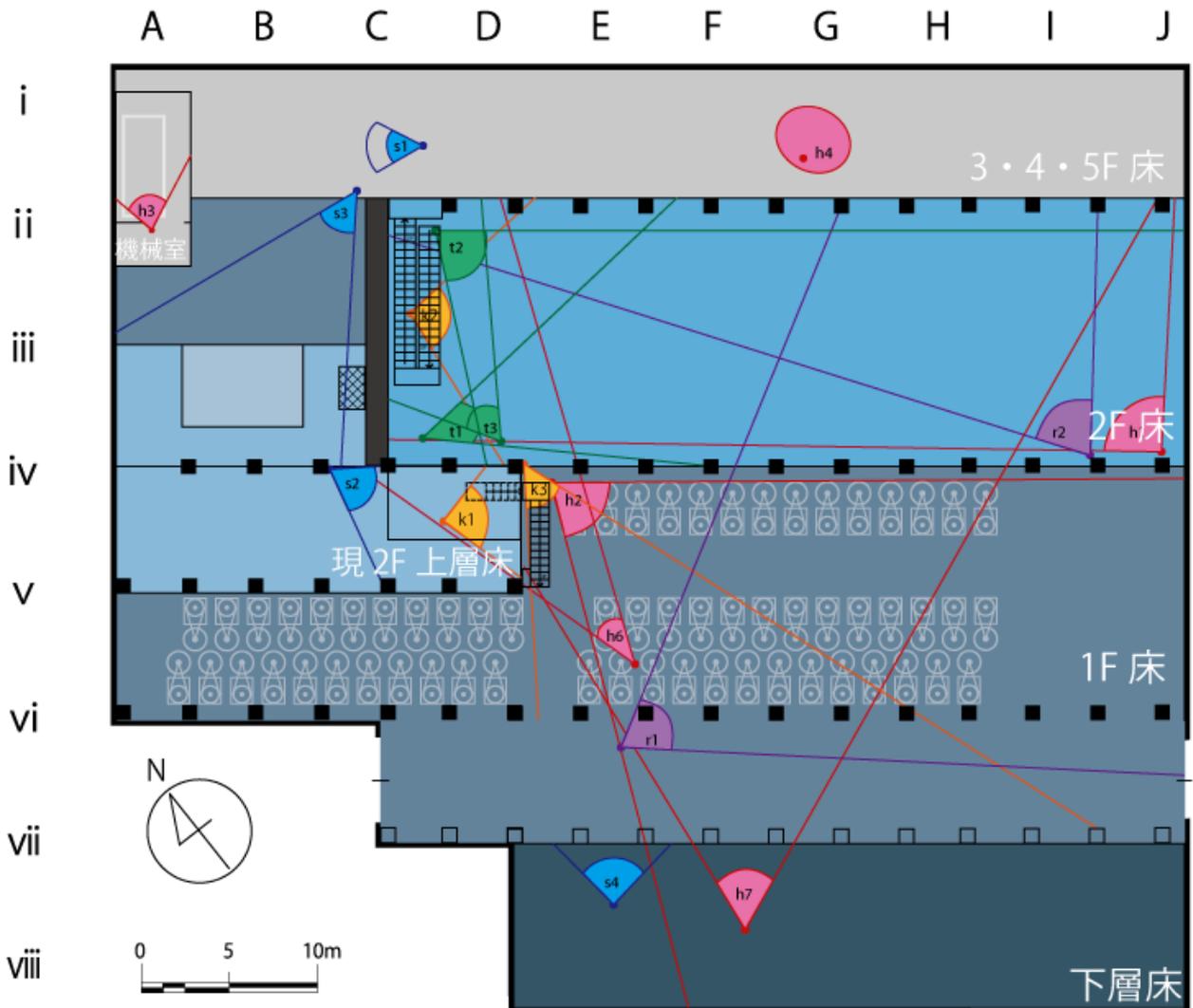


図-5 選鉱場内を写した全作品の撮影地点および方向を平面図上にプロット

## 5. 撮影者の言説および属性・発表形態との関連

### (1) 言説

- ・コンクリートと鉄骨が織りなす巨大な空間は、まるで宗教建築のような荘厳さをもっている（将治）
- ・この廃墟が選鉱場だという予備知識がなければ、巨大な神殿に迷い込んだような錯覚を起こしたに違いない。（公太郎）
- ・エッセイのだまし絵のよう（作品h6について、公太郎）

将治、公太郎の2作家は「見立て」の過程を経て、既知の他の美に依拠して対象を見つめていることが言説のなかに認められる。またここで宗教建築あるいは神殿に見立てられている作品はt2, h2, h7などと考えられ、これは4章(2)b)で幾何的規則を抽出しようとしているが廃墟に固有の特徴は見られないとした作品群に一致する。

### (2) 撮影者の属性と発表形態

- ・将治は書籍編集者を生業としており、対象の作品も記事と並列して発表されている。また、公太郎は雑誌への寄稿という形で発表しており、同時に記事を執筆している。この2作家には「見立て」が認められたが、他の3作家については「見立て」は認められなかった。
- ・小林伸一郎、小林哲朗は独立した職業写真家である。
- ・成宮は皮革製品デザイナーを主な生業としているが、作品は、本研究で扱った5作家の中では最も非説明的で抽象的であった。

## 6. 結論

### (1) 結論

本研究では以下の結論を得た。

- ①元あった積極的機能が失われた空間において作家は現在も本来の機能を発信しうる対象を意図的に捉え、対象の本来持っていた機能を手掛かりに、かつて生きられた時代の痕跡を掘り起こそうとしている。
- ②概念や物質の喪失そのものに意味を見出し、言及しようとする意志を全ての作家が共通して持っている。
- ③言語化の過程を伴う創作を行っている2作家の作品には幾何的規則を捉えたものがあるが、言説との照合によりこれらの作品では「見立て」の過程を経て、既知の他の美に依拠して対象を見つめていることが明らかになった。

### (2) 今後の課題

本研究では1対象地のみを扱い、意味を拾い上げる過程に関する一知見を得た。結論の妥当性をより客観的に示すには他の廃墟を撮影した作品も調査する必要がある。

また、本研究において撮影技法および撮影された要素については整理したうえで分析を行ったが、意味付けが確立されていない対象を扱ったため、意味付けの過程で介在しうる概念を網羅的に扱えたかどうかには疑問が残る。

時間経過によって変化する廃墟化の進行度合いと意味付けにどのような相関があるかについては本研究では触れなかった。複数の対象を扱うなど本研究と異なるアプローチを取ることによって明らかにできる可能性がある。

## 付録

### 参考文献

- 1) 「主題要素の写され方からみた都市景観写真の構図に関する研究 欧米10都市の観光ガイドブックを事例として」(神谷ら 日本建築学会計画系論文集 第528号, pp. 179-186 2000/02)
- 2) 「近代土木建造物の鑑賞特性に関する研究 写真家が選択した構図を通して」(横塚 2004/02)
- 3) ラサ工業株式会社社史編纂室「ラサ工業80年史」ラサ工業(1993/05)
- 4) J.J.Gibson, 1978 in *The Ecological Approach to the Visual Perception of Pictures* / (邦訳版1985, サイエンス社)